

母と私の、異文化との出会い直しの話

のりまつ よしこ
則松 佳子

●日本教職員組合・書記次長

全く私的なことを書くことを許していただきたい。

私の亡母は朝鮮半島からの引揚者だ。母はソウルで生まれた。朝鮮鉄道に勤めていた祖父は転勤が多く、母たち家族はピョンヤン、ウォンサンなどにも住んだことがあると聞いている。終戦時はプサンにいたため、「満州」や朝鮮半島北部からの引揚者ほど苦勞しなかったと話したが、それでも苦勞はあったようだ。

敗戦を、プサンから少し離れた島の工場の動員先で知った母たち女学生は、帰りの船では誰からともなく一か所に集まり、固唾をのんで下船の時を待っていた。「日本」であった当時の朝鮮半島では、朝鮮人より日本人が上であり、警察の対応も相手が日本人か朝鮮人かで違っていたという。母はよく「我が家にはオモニがいてね…」と話していたが、母の言う「オモニ」とはお手伝いさんのことだった。そんな日本人中心の社会で育った母たちは、「日本が負けた」と聞いて漠然と「仕返しされるのでは」と感じたようだ。

引揚船に乗り込むときには持ち出せるお金の制限をかけられ、持ち物チェックは厳しく、ほとんど着の身着のまま「本土」に上陸。その後は知人の伝手で何の縁もない土地に家を借りて住み始めた。残務整理で半島に残っていた祖父が母たちのもとにたどり着くまでの一年間、祖母は一人闇市で働きながら7人の子どもと義母との生活を支えた。

母の中ではずっと、朝鮮人は日本人より下と

いう感覚があったようで、母が朝鮮人について語る言葉はたいていマイナスのイメージを帯びていた。私はいつしか、朝鮮人って言葉は使わない方がいいもの、と思うようになり、「朝鮮の人」と言ってみたり、できる限り「韓国人」と言い換えてみたりしていた。アメリカ人、ドイツ人…と言えるのに、朝鮮人とはすらっと言えない。どうしても言う場合には、そこだけ小声になる。

教員として同和教育に出会い、その中で、朝鮮人という言葉回避することで自分の差別心とむき合わずにいたことに気付かされた。

30歳になるころ、同年代の在日朝鮮人三世の友人ができた。彼には「朝鮮の人」としか言えないでいることを告白した。すると彼に「僕は朝鮮人だよ。韓国籍も取ってないし、もちろん日本人じゃない。朝鮮人を朝鮮人と言えないなら、何て言えばいいの!？」と言われ、はっとしたと同時に、不思議なことに、その日から何の躊躇もなく朝鮮人と言えるようになっていた。

その後、友人と母とを引き合わせた。ウォンサン海がいかに美しいか、そこに行ったことのある者同士、楽しそうに語り合っていた。その日以来、母も自分の中にあった朝鮮人への差別心について私に話してくれるようになった。

様々な事情で、他の民族や文化を誤解していたり低く見ていたりする人は一定いるだろう。そんな人たちに私は経験から言いたい。異文化との豊かな出会い直しはいくつになってもできるよ、そして出会い直せたら、すっきりするし楽しいよ、と。